

月刊

地域保健

11
2007

●特集

海外へ羽ばたく
保健師活動

●FACE 2007

静岡県立大学看護学部看護学科教授
松田正己さん



静岡県立大学看護学部看護学科教授

松田正己
さん



皆さんの活動は今のままで十分、

変える必要はありません。

時代は必ず戻ってきます。

医療構造改革が急速に押し進められるなかで、特定健診・保健指導への準備に振り回され、何のために保健師活動をしているのかが見えにくくなっている方も多いかもしれません。今月は静岡県立大学の松田正己先生に、「生命倫理」という観点から、公衆衛生や地域保健の原点について語っていただきました。



まつだ・まさみ
東京大学医学部保健学科卒。
同・大学院修了(保健学博士)。
タイ等で国際保健に従事。(財)
結核予防会結核研究所国際研
修科長、米国ジョージタウン
大学ケネディ倫理研究所を
経て、1997年より現職。日本
健康福祉政策学会理事、日本
健康教育学会理事、やどかり
研究所副代表、Nursing
Ethics誌編集委員。

保健師の活動の 根っこにあるもの

— 今なぜ、「生命倫理」なのかということから伺います。

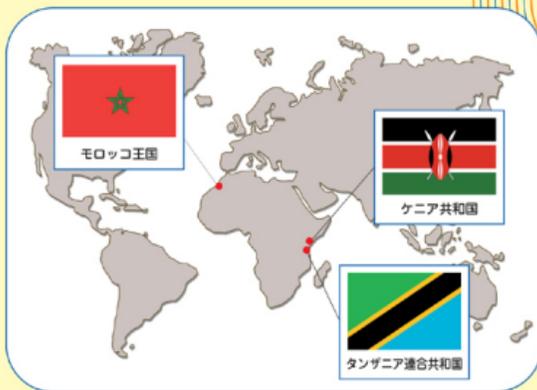
松田 私が生倫理という学問に出会ったのは、1994年のことです。研究のため訪れたアメリカの大学が生倫理のメッカともいうべきところで、個人的にも父が亡くなった後というところもあり、いのちについて深く考えることになりました。そこで生倫理に

ついて学んでいくと、考え方がブライマリヘルスケアと重なっていることに気づきました。看護学の分野で何となくモヤモヤしていた部分を生倫理の視点から見ると、かなり整理することができたのです。

アメリカでは80年代、エイズが流行したことで公衆衛生が凄まじい批判にさらされ、従来の方法を根本から変える必要に迫られました。生倫理の興隆はちょうどその時期と重なっていて、公衆衛生が生倫理と結びつき、新たな段階へと発展していきました。この動きはヨーロッパにも広まりましたが、

残念ながら日本ではこのチャンスが失われることはなかったのです。

生倫理や公衆衛生の理念を突き詰めれば、いのちがとても尊いということ、とてもはかないということ、そしてとても素晴らしいということに尽きるのだと思います。かつての日本の公衆衛生や保健師活動はそうした理念をベースにしていたのですが、最近では何のために保健活動をしているのかを改めて問い直さなければならぬ状態に近いのではないのでしょうか。根底の部分がぼんやりしていると、ちょっとしたことでもぐらついてしまい、今の医

海外へ羽ばたく
保健師活動

感染症対策、貧困問題へのアプローチなど、途上国においては、かつてのわが国が抱えていた公衆衛生的課題が残っている。地域・集団で問題を把握する視点やデータの扱い方など、日本の保健師が伝授すべきノウハウは多い。

今月は国内の「保健師あるべき論」から目を転じ、海外で活躍する日本の保健師の活動を紹介する。保健師の持つ潜在能力、存在価値を感じとり、近年の閉塞感を打ち破るヒントを得ていただければと思う。

p8 「海外活動を一度体験した人は、
また行きたくなります」

INTERVIEW

森口育子さん（兵庫県立大学地域ケア開発研究所教授）



p20 JICAにおける保健師の
海外活動の現状

国際協力活動で開発途上国と日本を結ぶ

森 淑江さん（独立行政法人 国際協力機構
青年海外協力隊事務局技術顧問）



p28 事例1

母親学級、学校保健で悪戦苦闘の日々

モロッコ王国での活動報

木内和子（モロッコ在住・保健師）

p36 事例2

地域巡回や講習会開催など
すべてが日本で役立つ貴重な体験

タンザニア連合共和国での活動報告

櫻井優子（静岡県富士健康福祉センター保健福祉課）

p44 事例3

海外で問われるのは「個人の力」

ケニア共和国での活動報告

近藤優子（ケニア在住・保健師）

「海外活動を一度体験した人は、また行きたくくなります」



photo: Sei Kamiyama

ネパール、フィリピン、タイ、インドネシアなどで保健師活動に従事し、現在は教員として国際地域看護学の教鞭をとる兵庫県立大学の森口育子さんに、海外活動の醍醐味をはじめとして、海外で求められるもの、日本との違い、出国前の心構えなどについて聞いた。

INTERVIEW

兵庫県立大学地域ケア開発研究所教授
森口育子さん

千葉県保健師専門学校、仏教大学社会学部卒業。国立公衆衛生院専門課程・研究課程修了。静岡県保健師研修時代に青年海外協力隊員としてネパール赴任。保健師学校教員時代にJICAの看護教育プロジェクト専門家としてインドネシアに赴任。1992年聖隷クリスティーア看護大学助教授、96年兵庫県立看護大学教授、2005年より現職。

©取材・文 編集部

「予防」の視点が欠けている

保健師が海外で活動する舞台は、東南アジアやアフリカ、中南米などの途上国ですが、現地の保健事情はどうなっているのですか？

森口 現在の日本と違って途上国では健康問題が顕在化しています。特に農村部では、感染症や母子の問題が多く予防や健康増進が重要ですが、「予防する」という考えが十分浸透していません。農村部では医師が足りないの、看護職が必要に迫られて治療や外傷の処置など行ったりしています。日本の保健師としては予防活動をイメージして現地に入ったのが、医療行為も求められる現実を目の当たりにして、多くの人が壁にぶつかります。

「予防する」という考えがないというのは、具体的に？

たとえばインドネシアの場合、地域には人口2、3万人ごとにヘルスセンターがあります。日本の保健所や保健センターと異なり治療も行っているのです。そこでは看護職が最も多く働いているのですが、彼女たちは医療行為に関心が高く、そこに来た患者の治療を主体に行っています。「あの母親は子どもが下痢をして、何回もここに連れてくるんです」と言うので、「なぜその子が下痢をするのか母親に聞いてみた？」と聞くと、「下痢をしたら薬を渡して治療するしかないでしょ」と言うんです。地域に出て見ると、井戸の水を沸かさないで飲ませているとかトイレがないとか、下痢の原因となる環境条件が見えるはずですが、地域に向かないのと、健康問題の背景を知って予防する

という考えが余りないんですね。乳幼児健診で体重減少した子どもが来ると、母親に「こんなに体重を減らしたら、だめじゃないの。もっと食べさせなさい」と指導するだけで、日ごろ何を食べさせているのか、どのような生活をしているのかまでは聞かないで一方の指導が多いのです。

→向こうには日本の保健師のような職種はないのですか？

森口 日本の保健師に相当する職種がある国は少ないですね。タイやインドネシアには大学の公衆衛生学部を卒業した「公衆衛生士」という職種がありますが、これは行政官に近い存在です。フィリピンのようにヘルスセンターで働く看護職を保健師と呼んでいる国もありますが、多くの途上国の地域看護職は、臨床の看護職より短期の教育で

幸に恵まれた まちが抱える 糖尿病合併症の悩み

徹底したデータで住民の意識が変わる



静岡市国保
年金課のスタ
ッフ

取材・文＝西内義雄（フリーライター）

サッカー、漁業、
南米からの労働力

静岡県といえば？ 今回の取材が決まったとき、思い浮かんだのは静岡の名物は何かという疑問だった。真っ先に出てきたのはサッカーだ。プロ（J1）の清水エスパスとジュビロ磐田の2チームがあるし、ジュビロにいたっては今回の磐田市をホームグラウンドにしているチームだ。もちろん、高校や少年の選手層も厚く、スपोर्टス王国というイメージがすぐに浮かんだ。食にこだわるのなら魚だろう。焼津や清水ならマグロだし、浜松周辺ではウナギやフグ、由比では桜海老も有名だ。変わったところでは旧清水市（現静岡市清水区）ではイルカの肉や鰻業も売られている。

そのほかの特徴を考えると南米からの労働力が挙げられる。1990年に

改正された出入国管理及び難民認定法により、日系人の労働力が爆発的に増えた経緯があるからだ。これは浜松や磐田などに大手企業の本社や工場が多く、その労働力として歓迎されたことによるものだろう。

こうした背景を考へながらやってきた静岡市磐田市へのアプローチは、まず東京駅から新幹線ひかりで約1時間30分の浜松駅へ。やけに目立つ駅前の

高層ホテルを横目に、今度は在来線で3駅ほど東京方面に戻った磐田駅に降り立つ。

思った以上にシンプルな駅前だった。磐田といえばそれなりに知られた町だし、世界的な企業の工場も多いので賑わっていると思像していたのだが……。後で聞いたところ、町の中心はすでに別の場所に移りかけているとか。車社会の地方都市ならではの問題がここにもあった。

最初の取材場所は駅から徒歩10分ほどの磐田市役所だ。迎えてくれたのは、国保年金課保健師の飯島万由子さんと同課係長の大見晴彦さん。まずはざっと市の概要から聞くと

「磐田市の人口は18万人弱、そのうち国保の加入者は6万人です。平成17年4月に周辺の1市3町1村（磐田市、福田町、竜洋町、豊田町、豊岡村）で合併し、現在の磐田市になっています。

主な産業はヤマハ、スズキ、ブリヂストンなどの輸送関連製造業で、従業員300人以上の企業が多く点在しています。工場が多い関係もあり、人口の約5%が外国人というデータもあります。そのほとんどはブラジルとペルーの方です」

説明してくれる飯島さんの後ろでは、子連れの日系ブラジル人とおぼしき家族が窓口で相談をしている。そういえば、浜松からの電車の中でも、市役所のロビーでも、ポルトガル語を話す子連れの親子を何人も見た。浜松や磐田では当たり前の光景のようだが、初めてこの地に来た人々には不思議な光景に思えるかもしれない。

「保健師は現在、4つの課に配属されています。予防の拠点となる健康増進課に27人、高齢者福祉と介護保険を行う長寿推進課に5人、主に精神保健を担当する社会福祉課に4人、支所の

